

VERITAS vos liberabit



鹿兒島純心女子大学
附属図書館報
第9号(No.9)
編集:図書館運営委員会
発行日:2020.3.13

特集 平成を振り返って

■巻頭言

人間教育学部教授 仙波 玲子

図書館報名「VERITAS vos liberabit」は、ラテン語で「真理はあなたたちを自由にする」(新約聖書ヨハネ福音書8章32節)という意味です。

✿ contents ✿

巻頭言	1
人間教育学部教授 仙波 玲子	
ふりかえって想うこと	2
獅子目博文	
本と出会う	3
福永 知久	
Book Review	4
(こと文2)肥後 沙采 (健 栄2)中村ひかる (看護2)川畑 由衣 (教・心1)高崎 麻衣 (こども4)岡山 莉穂 仙波 玲子	
USER'S voice	7
(大学院)山本 大聖	
選書ツアーに参加して	
お知らせ 編集後記	8

昭和最後の日となった昭和64年(1989年)1月7日、たまたま東京にいた。早朝のニュース番組で天皇崩御を知り、予定を変更して東京駅から皇居に足を向けた。1月の寒空の下、皇居前広場には、黙して記帳台に並ぶ人々の列があった。その姿を目にしたとき、激動の昭和に思いを馳せるとともに、平和で穏やかな時代の訪れを願った。

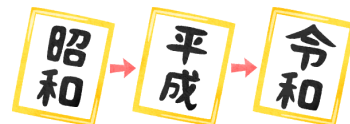
日本が「平成」に代わったこの1989年は、奇しくも世界史の大きな転換点でもあった。東欧諸国で始まった民主化の流れは、ハンガリーとオーストリア間の「鉄のカーテン」に穴を開け、ついには11月9日、ベルリンの壁を崩壊させた。ドイツ文学を専攻していた筆者もまったく予想しなかったほど劇的な展開であった。それは、単にドイツだけの問題ではなかった。第二次大戦後の世界を支配し重苦しいのしかかっていた東西冷戦の終焉を意味する象徴的な出来事であった。人々は新しい時代の到来を歓迎した。

さて、新時代への熱狂が去った後のこの30年間、平成はどのような時代であったろうか?一言で言えば、多様な価値観が生まれた混沌の時代であった。もはや、社会主義か資本主義かといったイデオロギーで世界を単純に東西に分けられる時代ではない。国同士の戦争の危機は減ったが、テロ組織の起こす悲惨な事件はいつどこで起こるかわからなくなった。温暖化の影響なのか、不安定な天候によって引き起こされる災害もいつどこでどのような形で起こるかわからなくなった。昔は新聞やテレビから皆が共有していた情報は、多彩なメディアから、一人

ひとりが取捨選択する時代になった。令和の時代に入り、長い間の偏見を乗り越え、「多様性」をもっと積極的に認めようという風潮はより強まるであろう。それは良いことであるが、その代わり、一人ひとりが様々な情報を吟味し的確で公正な判断をくださなければならない。

そのようなときに活かすべきなのが図書館である。昔は、図書館といえば、陽があまり入らない薄暗い空間で書架に並んだ本を選んで読む場所だったが、今の図書館は、さまざまな機能を持った情報収集・発信の場になってきている。紙の本以外にAV資料などの新たなメディアが入り、さらに、パソコンからインターネットで検索できるようになった。地方の図書館ではなかなか読むことができなかった本も、他の図書館から取り寄せてもらえるし、それどころかオンラインですぐに読めたりする。図書館も朗読会や読み聞かせなどの企画を催し、ただ読者の来館を待っているだけではない。令和の時代には、より一層多彩な機能を持ち、人々の集う場になっていくだろう。

今後、一層デジタル化、オンライン化が進めば、必要な情報は直ちに手に入れられるようになる。端末機器が家があれば、図書館すら要らなくなる。しかし、そうはならないと思う。紙の手触りと匂い、そして何よりも、心落ち着き読書に集中できる静寂な空間、同じく読書に勤しむ人々と共有する穏やかな空気は、今以上に求められるのではないだろうか。



ふりかえって想うこと

個と集団が共鳴する学園

看護栄養学部 教授 獅子目 博文

本学に赴任して12年、暦が一巡する。かつて鹿児島県の教育に携わり、教員の研修や採用にも関わった。教員養成の重要性を確信し、授業をしたかったこと、カトリックの洗礼を受けていたこと等も手伝って、本学国際人間学部英語コミュニケーション学科に籍を置かせていただくことになった。その後、こども学科へ移り、本年度からは健康栄養学科に籍が変わったが、平成22年に設置された教員養成センターと一緒に、一貫して教員養成に携わっている。

赴任した最初の年、3年生の授業で「鹿児島純心女子大学の学生はどこがすばらしいと思いますか」と質問した。回答は「礼儀正しい」、「ノルマをこなす努力をする」、そして「品がいい」だった。嬉しかった。品は品位、品格、自分や所属集団に誇りを持っておればこそその言葉である。学生たちが鹿児島純心女子大学生であることに誇りを持っている、それが嬉しかった。施設設備のすばらしさ、先生方の熱意、それを支える職員の努力、それらが相まって学生の心に響いているのを感じた。平成16年に『国家の品格』（藤原正彦著 新潮社）が出版され、画期的日本論として話題を集めていた。17年には、それを受けて『女性の品格』（坂東眞理子著 PHP研究所）が「品格ある国家は品格ある個人の存在が前提になる」として「凛とした女性」を謳い、ベストセラーになっていた。以来、私の本学における勤務は、この「品がいい」という印象に支えられている。

かつて私は、「個と集団が共鳴する学校」を経営の目標にした。学校は、一人一人の個性を

伸ばす場でなければならない。集団の力によって個が成長し、成長した個の総体である集団が成長する。個と集団が相乗的に高まっていく。大切なことは、教育は子どもそのものが目的であり、何かの手段にしてはならないということである。本学においても然り、鹿児島純心女子大学で4年間を過ごすことが、学生一人一人にとって、現在及び将来における自己実現につながるものでなければならない。

昨年の9月、本学のキリスト教文化研究センターの研修旅行（奄美の教会巡り）に参加した。大島紬の美しさは、一本一本染められた絹糸を丹念に織り上げたところにあるそうだが、奄美におけるカトリックの歴史に触れながら、横糸（空間軸）と縦糸（時間軸）が織りなす様々な人生、その彩を見たような気がした。行く先々で温かく迎えてくださる信者の方々、その向こうに、時代の荒波の中で教会を維持し信仰を守り続けた共同体の皆さん、その共同体の一人一人と深く関わり導いてこられた司祭、修道者たちの確かな存在を感じた。信者の方がいみじくも語られた隣人愛や奉仕の精神、無私の心、純粋にその人そのものを大切にする心を確認する旅だったように思う。

教師人生もまた、横糸と縦糸が織りなす色模様である。教える者と教えられる者、それを取り巻く多くの人々との間に紡がれる色模様である。大島紬の「締め機（しめばた）」が設計図通り寸分の狂いなく織り上げるのと違って、織り上がってみなければ分からない色模様である。



本と出会う



子どもが絵本と出会うとき

看護学科 講師 福永 知久

「読み聞かせは大切」とよく言われますね。
それは単なるイメージではなく、子どもの生育に実際に効果がある話なのです。

赤ちゃんの聴覚は、胎児のうちにほぼ完成します。やがて喃語を経て会話を覚えていく子どもは、そのずっと前から、感情も語彙も学び始めているのです。「楽しみだね」「元気に動くね」などの温かな声は、ぬくもり・喜びなどの感情とともに、赤ちゃんに届いています。周りの大人からの声かけ、そして愛情が言葉と心を育てるのです。

心に豊かな土壌を持つ子どもは、やがて豊かな人生を实らせるでしょう。その栄養の1つとなるのが、絵本の読み聞かせです。

そして、読み聞かせを始める前から、土壌作りはもう始まっています。

ミルクをあげる時、おむつを替える時、散歩の時、「楽しいね」「今日は寒いかな」など語りかけることが、赤ちゃんに安心を与えます。安心して世界を知っていくことが、絵本を楽しむ力につながります。

例えば、初めてりんごを食べたとき。りんごの見た目、色、触った感覚、香りや味を知るでしょう。その子が、福音館書店の『くだもの』という絵本に出会ったら？

絵の中で「さあ、どうぞ」と差し出されるりんごを見た子どもの気持ちは、表情に表れます。絵本のりんごが、自分の知っているりんごであることがわかるのです。

絵本とは出会いの場で、読み聞かせは、想像力を育てる場です。

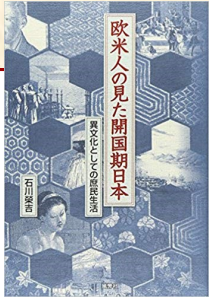
かつて食べたりんごを追体験できる。そして絵本の中で新しい経験を得て、心を広げ、また現実世界の広さを知ることできます。子どもの絵本への反応は、一緒に楽しむ大人にも、喜びや気付きを与えてくれるでしょう。

食べ物が健康な体を作るのと同じで、絵本は心に栄養を与えてくれます。楽しいだけでなく、様々な感情・感動を絵本を通じて学ぶことで、健康な心が育っていきます。

あなたが大切な子どものために1冊を選ぶとしたら？ ぜひ考えてみてください。

Book Review

おすすめの本を紹介していただきました



『欧米人の見た開国期日本 異文化としての庶民生活』 石川榮吉著（風響社）

私のおすすめする本は『欧米人の見た開国期日本 異文化としての庶民生活』です。開国期の日本は欧米から見てどのように見られていたのか、沢山の論文や資料から分かりやすくまとめられた1冊です。

例えばみなさんは、日本の猫といえばどのような猫を想像するでしょうか？

開国したばかりの日本では、猫はあまりにも愛玩されており、鼠を全然捕まえないので、鼠が非常に多かったとか。しかも、ごく怠け者のくせに甘えることだけは達者。これが当然である現代ではありますが、当時の欧米人からすると常識違いだったそう。

また、日本猫の尾は兎のように小さな房しかない、という点にも注目されていました。最近では血が混ざりめっきり日本猫も減ったようです。

どうでしょう、身近な猫という存在を一つ取っても日本と欧米では少し違うようです。

猫は分かった、という方は日本美人なんてどうでしょうか？

日本人女性は美しくない、美人が少ない、と漏らす当時の欧米人は少なくはありません。しかし、未婚の娘に対するものに関しては愛らしさ、美しさを表すものが遥かに多いそうです。色白で赤みを帯びた肌、豊かな黒髪、黒い瞳などを含めて、最大級とも呼べる程の賛辞を遺している者もいます。ただし、既婚者のお齒黒などはそれら全てを台無しにするもので忌避や嫌悪される傾向にあったようです。なぜ自分の妻にそのようなことを強いるのか、なぜ醜悪な見た目にわざわざさせてしまうのか、という風習に対する落胆の意見も垣間見られました。

このようにこの本では当時の日本の身近な姿を鑑みるのが可能なのです。身近なようで遠い昔の日本という国を知る足掛かりになるかもしれない一冊だと思います。興味の出た方は、ぜひ、お手に取って読んでみてください。

ことばと文化学科2年 肥後 沙采



『スマホを落としただけなのに』 志駕晃著（宝島社）

図書館所在 1F文庫 913.6 SH

「スマホを落としただけなのに」。このタイトルを見た瞬間、恐怖を感じずにはいられなかった。

この本は、誰にでも起こり得るタクシーにスマホを置き忘れるというシチュエーションから始まる物語である。彼氏に電話をかけた主人公である麻美は、スマホから聞こえてくる聞き覚えのない男の言葉に言葉を失ってしまう。たまたま落ちていたスマホを拾ったという男から、彼氏のスマホが無事に戻ってきて安堵した麻美だったが、その日を境に奇妙な出来事が起こるようになる。身に覚えのないクレジットカードの請求、SNSでつながっているだけの親しくない友達からのしつこい連絡、彼氏のスマホから麻美の個人情報の流出。そして時を同じくして、人里離れた山の中で次々と長い黒髪の若い女性の遺体が見つかり、連続殺人事件として捜査が始まる。スマホを拾ったのは、一体誰だったのか。連続殺人事件の真犯人はだれなのか。平穏な日常が、音

を立てて崩れていく様子を描いた作品である。

この小説は、「スマホを拾った側」、「スマホを落とした側」、「警察」といった3つのパートで構築されており、この三者の視点を行き来しながら物語を進むため、作品に引き込まれ身に迫る恐怖を伴う臨場感を与えてくれる作品になっていると感じた。スマホを置き忘れてしまうという経験は、誰しも身に起こる身近な出来事である。この本では、現代多くの人が利用しているスマホが、身近なSNSを介して凶器となり、日常生活の中にこそ真の恐怖が潜んでいることを教えてくれる。SNSは現在の社会にとって必要不可欠なツールであるが、自ら情報の公開の危険性を十分に理解し、ネット社会とうまく付き合っていくことが大切であるとこの本を通じて感じた。この小説を読んでネット社会との繋がりを見直す良い機会になればよいと思う。

健康栄養学科2年 中村 ひかる



『鳥に単は似合わない』 阿部智里著 文芸春秋

図書館所在 大学1F文庫 913.6 A

八咫鳥（やたがらす）の次の王、若宮の後（きさき）候補として大貴族東家・西家・南家・北家、各四家の代表の姫たちが後に選ばれるべく、桜花宮（おうかぐう）という専用の宮に移り住み後の座をめぐる華麗な戦いを繰りひろげるお話です。人間に代わり八咫鳥が支配する世界「山内（やまうち）」では人は鳥形にも人形にもなることができます。大貴族の二の姫として大切に育てられた東家の姫は八咫鳥とは何なのかすら知らされずに成長します。東家以外の各三家の姫たちは后になるため美と教養を磨き上げ、それぞれの一族の政に対する思惑のもと、命運を背負って後の座を競い合います。一方で、后選びに頓着しない若宮の態度と姫たちが心に秘めている覚悟や思いなど、様々な事件が起こるなかで真相が徐々に明らかになっていきます。

四家の姫の後の座をめぐるかけ引きや、容姿や才能に対する嫉妬、乙女心が分からない若宮に恋焦がれる思いなど、読んでいてとてもはらはらドキドキさせられました。もし自分がこの立場だったらどう考えるか、何をしようとするかなど、登場人物に自分を重ねて読むのも面白かったです。私がこの本と出会ったのは書店の小説コーナーでした。最初は表紙の挿絵が綺麗だったことと本のタイトルの不思議な感じから古典系のどんな物語

なのだろうと興味を持ちました。また、この本の作者である阿部智里さんが大学在学中20歳でこの本で作家デビューしたというのが目に入り余計に気になったというのも一つの理由です。私はジャンルではファンタジーがとても好きでよく読みます。

この物語は全部で6冊あるシリーズになっていて、八咫鳥の世界がとても緻密な設定で描かれています。また、この本の面白さは一巻目の「鳥に単は似合わない」は四家の姫たちからの視点で2巻目の「鳥は主を選ばない」は若宮からの視点で書かれているということです。二つ読んで話の全体像が見えてくるため、なるほどと楽しく読むことができます。シリーズを通して話が進む中で、山内という世界と日本神話とのつながり、猿と天狗の登場など話のスケールが壮大なものになっていきます。ここでは読んでからのお楽しみということであえて内容には触れないでおきます。一巻目では姫たちの自信と誇り、一族をかけたバトルが若宮によって意外な展開を迎えます。ファンタジーだけドミステリアスな部分もあること、これも面白さのポイントだと思います。皆さんもぜひ一度この本を手にとってみてください。そして、この本の面白さをぜひ味わってください。

看護学科2年 川畑 由衣



『杜子春・南京の基督』 芥川龍之介著 (角川文庫クラシックス)

*芥川龍之介全集などにも収載

私は芥川龍之介の「杜子春」について紹介します。私がこの本に出会ったのは小学校6年生の時です。その時から芥川の作品を読むようになりました。芥川の作品は短編小説が多くとても読み易いです。私は特に童話が好きです。その中でも今回紹介する「杜子春」は、子供向けで話が面白く人間の生き方について考えさせられる話です。話の内容は、唐の都洛陽が舞台となっており、「杜子春」という名の若者が主人公です。杜子春は、元は金持ちの息子でしたが、今は財産を使い尽くしてしまい、その日の暮らしに困るくらい憐れな身分となってしまいました。そこで、川に身を投げようと思いついたところ、片目眇めの老人が杜子春の前に現れて、杜子春を助けるという話です。杜子春は片目眇めの老人に会った翌日に天下第一の大金持ちになりました。

た。とても贅沢な暮らしをし、今まで道で行き会っても挨拶さえしなかった友達などが朝夕遊びにきて、毎日酒盛りを開いていました。しかし、3年ほど経った時にはすっかりお金が無くなってしまいました。すると、毎日遊びに来ていた友達も挨拶一つしてくれなくなりました。そこで杜子春が思ったことは、人間はみんな薄情であるということです。杜子春が大金持ちになった時はお世辞や追従をするけれども、貧乏になると易しい顔さえもして見せないということに気づきました。私は、この話を読んでたくさんのことを学びました。中でも、何度も何度も失敗を繰り返してもしっかりと前を見て生きていくことが大切だと学びました。その他にもたくさん面白い場面や学びに繋がる場面もあるのでぜひ読んでみてください。

教育・心理学科1年 高崎 麻衣



『恐竜まみれ：発掘現場は今日も命がけ』
小林快次著 新潮社

皆さんは、絶滅したはずの恐竜の子孫が今も地球上に生きていますって知っていますか？それは、鳥です。鳥の祖先にあたる生物が何かはながいあいだ謎でしたが、ここ何十年かの研究で、それが恐竜であることがわかってきました。

私は、ゼミのテーマを何にするか迷っているとき、自分の好きなものがファンタジーと事実との中間にある物だと気づきました。そして、恐竜をテーマに選びました。恐竜は、子ども達も興味を持っていて、学校では習わないものの、図鑑なども沢山出版されています。

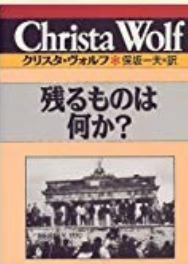
恐竜は、以前は、ゴジラのように直立に近い体勢で二本脚で立ち、尻尾を引きずって歩いているイメージでした。しかし、最近の研究で、恐竜は、背中を水平にして二本脚で立っていることがわかってきました。図鑑でも年代によって、恐竜の描かれ方が違ってきます。今の子ども達とその

お父さん世代とでは恐竜のイメージがだいぶ変わってきています。そんなことをゼミ論では研究しました。

そうした最先端の恐竜研究をリードしているのが北海道大学の小林快次先生です。2019年7月に上野の国立科学博物館で行われた「恐竜博」ではじめて展示された日本の恐竜研究史上最大の発見といわれる「むかわ竜」を発見したのも小林快次先生です。

この本は、小林快次先生が恐竜に興味を持ったきっかけや、その後、世界中をフィールドワークしたときの危険な話や面白い話などが詰まっています。また、「むかわ竜」発見の裏話も載っています。著者は、前書きで「自分で発見する喜びを伝えられたら」と述べていますが、自分も何か発見しに外に飛び出したくなる本です。

こども学科4年 岡山 莉穂



『残るものは何か?』
クリスタ・ヴォルフ著 恒文社

図書館所在 1F和書 943.7 WO 1

クリスタ・ヴォルフは、旧東ドイツ（ドイツ民主共和国）を代表する女性作家だ。人生において三度、国家の崩壊とそれに伴う価値観の徹底的変化を体験した。すなわち、ヴァイマル共和国、ナチス政権そして東ドイツの崩壊だ。その体験を基に、個人の内的葛藤に真摯に向きあい、社会の抱える課題（特に女性の問題）に取り組んだ。彼女の小説の多くは邦訳が出版されていて日本でも読むことができるので、興味があれば、ぜひ手にとってほしい。ここでは、東ドイツの崩壊にまつわるエピソードを取り上げたい。

ベルリンの壁崩壊からまもなくして発表した小説『残るものは何か?』において、彼女は、東ドイツの秘密警察組織「国家保安局（通称シュタージ）」に監視されていることに気づいた女性作家の一日を描いた。元々は1979年に書いて封印していた物を1989年に手直して公表したため、西側メディアは一斉に、東ドイツ消滅を目前にしての「アリバイ工作」だと批判し、作家たちがヴォルフを擁護し、大論争を巻き起こした。

しかし、ヴォルフとシュタージを巡る騒動はこれで収まらなかった。ドイツ統一後、シュタージに保管されていた大量の文書が公開され、多くの一般市民がシュタージの協力者として、友人や隣人の情報をシュタージに提供していたことが明らかになった。このとき、ヴォルフもまた、若い頃にシュタージの「非公式協力者」であったことが暴露され、再びスキャンダルとなった。彼女の行動の是非は措いておくとして、国民を恐れさせる組織の被害者にも加害者にもなりうる状況にあった作家の葛藤には心が震える。

秘密警察の監視の眼が張り巡らされているような世界において、芸術家が政治や社会に対してどのようなスタンスをとるべきか、ナチス時代にも東ドイツ時代にも問われた問題だ。国を捨てて亡命すべきか、国に残って抵抗すべきか、国にあって沈黙を貫くべきか、容易に答が出るものではない。

クリスタ・ヴォルフは、2011年ベルリンで82年の生涯を終えた。

人間教育学部 教授 仙波 玲子



私にとっての図書館



大学院
山本 大聖

User's Voice

フェなどを勉強の場として活用している人も見受けられる。確かに、そういった場所は気軽に利用でき、短時間、もしくは長時間の利用ができる場所もある。最近の施設ではインターネットも利用できる場所も増えている。一方でファーストフード店やカフェなどで勉強をしていると怪訝な顔をされることや、時にはお店側から注意を受けた経験がある人もいるのではないだろうか。

このような環境の中で、私たちは学士である自覚を持つべきだと私は思う。インターネットから探し得る情報にも信用できる情報も確かにあるだろう。しかし、出典が明らかになりにくく、明確でないものが多いのも確かだ。私たち学士は、確かな知識を獲得していかなければならない。一般人でも知ることが出来る内容だけではなく、専門知識と呼ぶに値する知識を得なければ、私は学士である意味なさないように思える。

そのようなときに学士である私たちが利用すべき場所は「図書館」である。「図書館」にはインターネットの使用やパソコンの持ち込みが許可された場所であることはもちろん、蔵書も充実している場所であり、何よりも清閑を得られる場所である。「図書館」では、先ほど述べた勉強の場所で考え得る問題は起きえないし、確かな知識が得られる場所となっている。皆さんも現代の喧騒から離れ清閑な「図書館」を利用してはどうでしょうか。

皆さんが大学にいる間には、きっと様々な学習をする機会に恵まれるでしょう。そういった中で、定期テストや資格取得のために、学業に打ち込むこともあるだろう。

そんなときあなたはこういった場所で勉強をしているだろうか。また、その勉強の場では、自身が集中できる場所を無意識に求めているのではないだろうか。

勉強する場所として考える場所として、まず自宅がある。ここでは必ずといっていいほど、自己の空間を獲得することができ、集中することが出来るだろう。他にもファーストフード店やカ



選書ツアーに参加して

今回2回目の選書ツアーに参加させていただきました。毎回とても楽しみにしています。純大の図書館はとても充実しているのですが、日頃利用していると、ある分野に特化した本がもっとあったらいいなと思うこともあります。選書ツアーでは、たくさんのジャンルから本を選ぶことができ、読みたかった本を純大の図書館の蔵書に加えてもらうことができます。選んだ本が純大の図書館にあった時はとても嬉しかったです。学生の余裕のある時にたくさんの本と出会いたいと思います。

PN あやか



お知らせ

図書館オリジナルバッグ デザインを新たに！

バッグのデザインが新しくなりました。
スタンプラリーに参加し、ポイントを集めると、好きなバッグがあなたのものに♥
スタンプカードは在籍期間有効です。

皆さんの参加をお待ちしています★



古本募金のご報告



古本募金を開始して3年目となりました。
今年も沢山の本を寄付していただきありがとうございます。いただいた古本は換金され「純心未来基金」へ積み立てられ、学園の教育・研究のために役立てられます。これからも宜しくお願いします。

2019年度 寄付金額合計	81,954円
(内訳)	
大学の除籍本・回収ボックス	64,317円
卒業生・保護者・旧職員ほか	14,439円
鹿児島純心女子短大図書館	1,598円
きしゃぼん(嵯峨野株式会社)	1,600円

卒業後も利用できます

在学時より利用制限はありますが、貸出も可能です。ご利用下さい。(※貸出冊数5冊、貸出期間2週間)
大学に来られたら、まず大学の受付で入館の手続きを行って下さい。その後、図書館へお越しください。
皆様のご利用をお待ちしています。

編集後記

令和最初のVERITASをお届けします。平成から令和に変わり本報も9号となりました。「巻頭言」で仙波先生は、昭和の最後の日から始めて、世界史的視野で平成を振り返っています。今回は、恐竜の時代からスマホの時代までさまざまな時代の本が取り上げられています。現代を生きる私たちは、その時間の長さをあまり実感することなく、概観することができます。しかし、一つ一つのコラムを丁寧に読み解いていくとそこには深く長い時間と空間が横たわり、人生の奥深さを教えてくれているようです。体験できない未知の人生をも体験させてくれるのが読書でしょう。獅子目先生が仰るように「織り上がってみなければわからない」のが人生模様です。福永先生は「愛情と言葉が心を育てる」と仰っています。赤ちゃんにまけないように私たちも書物の森から栄養になる言葉を探してみたいものです。それぞれ引き込まれる文章で、学生や先生方の紹介された本、一冊一冊を読んでみたい誘惑がふつふつとわいてきました。(KM)



鹿児島純心女子大学附属図書館報

VERITAS vos liberabit

No.9

編集・発行：図書館運営委員会

発行日：2020年3月13日

〒895-0011

鹿児島県薩摩川内市天辰町2365番地

TEL：0996-23-5311 / FAX：0996-23-5030

E-mail: veritas@jundai.k-junshin.ac.jp